



図解

# 横芝光町の歴史 1

原始時代（旧石器時代～縄文時代）



平成 23 年 3 月  
横芝光町教育委員会

## はじめに

今から5年前、横芝町と光町が一緒になって、横芝光町という新しい町ができました。横芝光町は南を暖流が洗う太平洋に、水田が広がる九十九里平野、北部は下総台地の緑濃い里山がコントラストを付け、町の中央をゆったりと栗山川が流れ、文字通り山紫水明の地と言えます。この豊かな土地には古くから人々が住み、様々な営みや文化を育んできました。その土地の歴史を知ることは、自分たちの足元を見つめなおし、この地に愛着を持つきっかけになることでしょう。

図解「横芝光町の歴史1」では、まず土地の成り立ちとその地形について取り上げ、町の地勢を紹介します。そして人類がこの地にはじめて足跡をしるし、町の歴史が始まった旧石器時代から、日本の原始時代を華やかにいろいろ、町内でも多様な文化が栄えた縄文時代までを取り上げます。これによって横芝光町にも古くから多くの人々の営みがあり、様々な文化が栄えた歴史があったことを知っていただければと思います。

横芝光町教育委員会  
教育長 井 上 哲



## 目 次

### はじめに

### 年表1. 原始時代（旧石器時代～縄文時代）

1. 大地の成り立ち	2～3
2. 山（台地）の地形	4～5
3. 平野（低地）の地形	6～7
4. 初めて足跡をしるした人々（町の歴史の始まり）	8～9
5. 旧石器時代の生活	10～11
6. 最古の縄文土器	12～13
7. 縄文土器のいろいろ	14～15
8. 貝塚文化が栄えたころ	16～17
9. 縄文人の生活	18～19
10. 低地に進出した縄文人	20～21

本書は、横芝光町の歴史をわかりやすく紹介しようと考へて、執筆・編集しました。そのため、写真や図を多く収録し、極力文章を少なくしました。もし、わからない点や、収録している資料を実際にご覧になりたい時など、下記へご連絡ください。

なお、一部写真を多喜町教育委員会から提供いただきました。記して御礼申し上げます。



編集・執筆責任 横芝光町教育委員会社会文化課  
生涯学習班文化財担当 道澤 明  
電話0479-84-1358 町民会館内

## 横芝光町の歴史年表(旧石器時代～縄文時代)

時代	原 始										弥生時代	
	旧石器時代					縄文時代						
	前期	中期	後期		草創期	早期	前期	中期	後期	前期		
前期	中期			草創期	早期	前期	中期	後期	前期	中期	弥生時代	
世界・日本の主な出来事	70~15 万年前	15~3 万年前	3~2.3 万年前	2.3~1.8 万年前	1.8~1.5 万年前	1.5~1 万年前	10~7 千年前	7~5 千年前	5~4 千年前	4~3 千年前	3~2 千年前	
	アフリカで猿人が最古の石器を残す	アフリカで猿人が最古の石器を残す	日本人(ネアンデルタール人)が日本列島に人類広がる。	ナイフ形石器文化隆盛	岩宿遺跡	細石器文化	夏島貝塚・上野原遺跡	関山貝塚・黒浜貝塚・諸磯貝塚	三内丸山遺跡・尖石遺跡・加曾利貝塚	堀之内貝塚	吉野ヶ里遺跡・唐古・鍵遺跡(邪馬台国)	
千葉・横芝光町の出来事	3 万年前	2.5 万年前	1.8 万年前	長倉北長山野遺跡	寺方古墳群・長倉宮ノ前遺跡	1 万年前	木戸台貝塚・篠本神山谷遺跡・城山遺跡	神山谷遺跡・篠本新台遺跡	長倉東長山野遺跡・虫生駒形遺跡	姥山貝塚・芝崎遺跡・中島遺跡	宮ノ前遺跡	

# 1. 大地の成り立ち

横芝光町は千葉県東部、太平洋の波が洗う九十九里浜の中ほどにあり、温暖で緑豊かな農村風景が広がるところです。その町の大地は大きく二つに分けられ、北西部に塊のように点在する台地と、南東部では海岸に沿って広がる平野とからなっています。台地は下総台地と呼ばれ、千葉県の北半分を占める広大な地形で、平野は九十九里浜の名前をとって、九十九里平野と呼ばれています。



太平洋から見た町



長倉から見た寺方の平坦な畑が広がる台地

下総台地は、今から40万年前くらいから海に堆積した砂の層と、その上に赤土と呼ばれる火山灰の関東ローム層が堆積し、その後の河川の浸食によって今のような地形になっています。ところが、町内ではもっと古い地

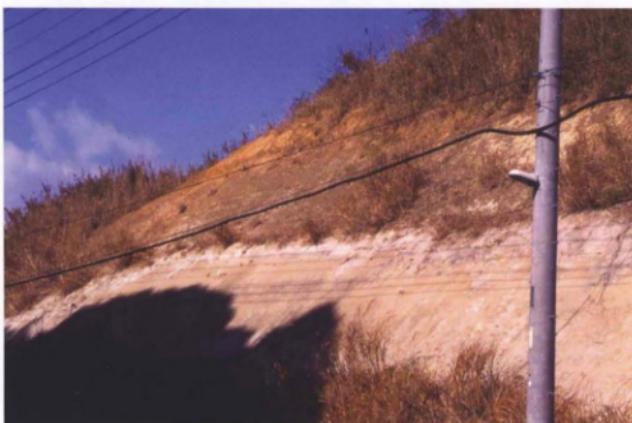
層が現れているところがあります。通称古川石合の岩礁といわれる小高い丘と、その南側の浅間神社がある丘です。また、石合の県道を挟んだ西側にも同じ岩山が見られます。これらの岩は砂が固まってきた層で、よく見るとところどころ貝化石を含んでいます。この層は今から三百万年ほど前に堆積した上総層群最下層の黒滻層に相当すると思われ、房総半島の勝浦市や君津市などに見られ、山武市成東の浪切不動院下や同市早船の岩も同様と考えられます。貝化石にはカキやカガミガイなどの浅海性の種類が見られます。この岩石層がなぜこの地域だけ分布するのか、どのくらい古い層なのか、いまだよく分かっていないところが多く、今後の研究の課題です。



古川石合の岩礁



本町八坂神社境内にある岩



母子と小田部の間の切通し

下総層群と  
上総層群との境

母子から小田部に抜ける道の切通  
しは、今でこそ草で覆われています  
が、工事で削ったとききれいに地層  
が現れています。その下半分は白  
っぽい灰青色で硬くなった泥層で、  
上の層とは明確な境を示していました。  
これは上総層群最上層の金剛地  
層に相当し、山武市から南に見られ  
ます。

上総層群の上には下総層群と呼ば  
れる下総台地を構成する地層が堆積  
しています。中台の崖の写真では、下から上泉層、清川層、木下層などの、  
やわらかい砂の層が見られます。これらの層からはよく貝や象などの化石  
が産出され、町内からナウマン象の牙の化石が出たという記録もあります。



中台の台地を構成する地層

下総層群 上泉層 清川層 木下層

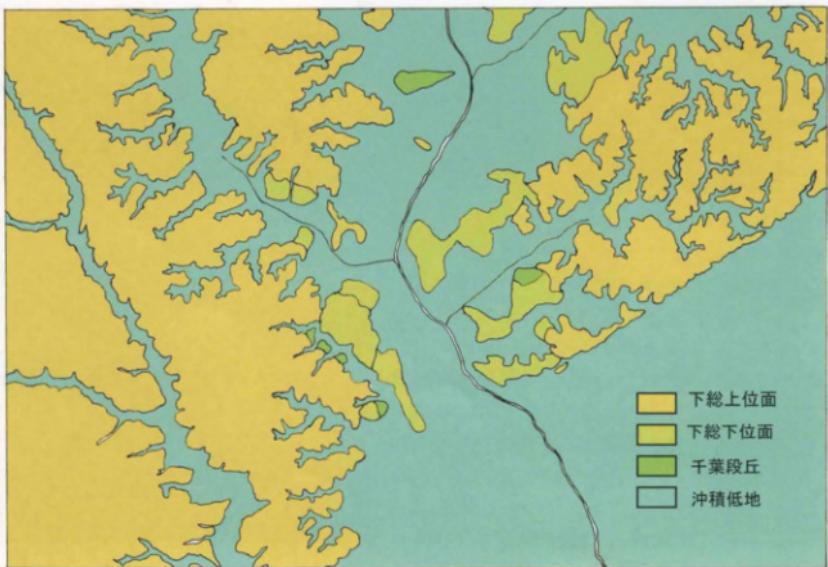
## 2. 山（台地）の地形

町の北部に分布する台地をよく見ると、平らな畠が広がっている所と、谷が深く入り込んで起伏がある所とがあります。また低くなっている台地もあります。このように同じ台地なのに、様々な地形を示すのは、台地のでき方に違いがあるからです。それは台地ができて古くなるほど浸食が進みます。また、台地は川の浸食と土砂の堆積によって新しくできます。それによって、下の図のような台地が町の中にはあります。

最も古い下総上位面は下総台地の大部分をしめ、谷が深く入って浸食が進み、丘陵のようになります。標高は高い所で40mを越えます。少し低い下総下位面は栗山川流域に分布し、平らな畠が広がり、台地の周りはあまり谷が入っていません。標高は少し低い35mほどです。千葉段丘は東西に走る谷の南側に分布し、町内では小川台と長倉に見られます。標高は20m以下になります。

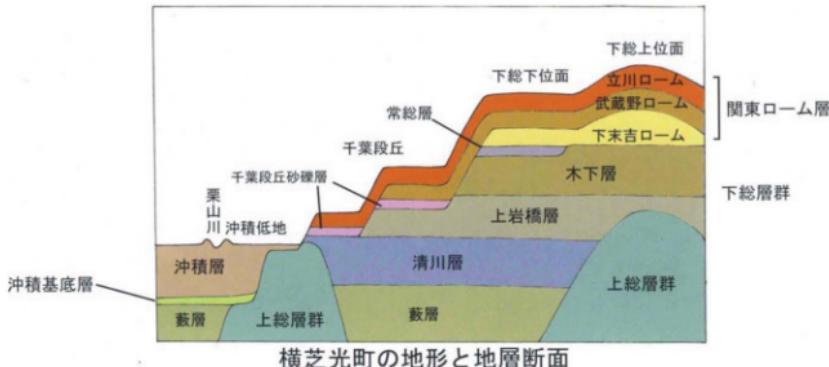


丘陵のような地形が続く大総の下総台地

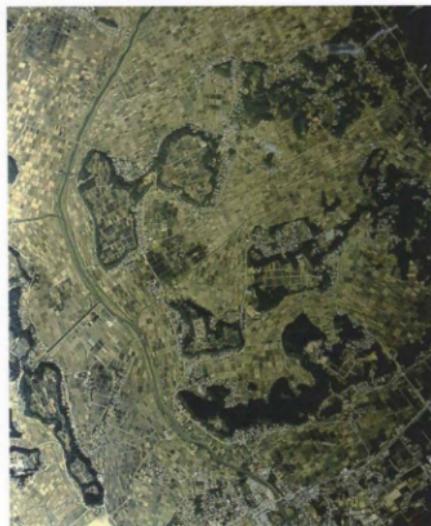


このような台地には、赤土と呼ばれる関東ローム層や、かつての海につもった砂層が堆積しています。下総上位面の台地には砂層の下総層群

(木下層、上岩橋層、清川層、藪層)の上に関東ローム層(下末吉ローム・武藏野ローム・立川ローム)が堆積しています。下総下位面では木下層を削って堆積する常総層に、関東ローム層が載っています。千葉段丘の台地は千葉段丘砂礫層が台地を削って堆積し、その上に関東ローム層の武藏野・立川ローム層が堆積しています。この地形の形成と、堆積する地層との関係を示したのが、下の図です。



横芝光町の地形と地層断面



上空から見た台地の姿  
(南北に走る線は栗山川)



平坦な畑が広がる寺方台地



関東ローム層が堆積する台地の地層  
(篠本、ひかり工業団地内)

### 3. 平野（低地）の地形

平野は町の南東部を占める九十九里平野と、北西部の台地の間に入る谷津とがあります。九十九里平野は太平洋の波が洗う九十九里浜に沿うように、北の飯岡から南の一宮まで延びる海岸平野です。その形成は今から1万年前以降の海面上昇（縄文海進と呼ばれる）で、海面より低かった所に海流で運ばれた土砂が堆積してできたと言われます。また、台地の間に入る谷津は、河川が運んだ土砂の堆積によってできていて、海岸平野と共に最終氷河期以降の温暖期（地質年代では沖積世あるいは完新世と言う）に形成されたことから沖積平野とも呼ばれています。九十九里平野は形成される過程で、海岸の砂堤（砂州）と後背湿地とが交互に並び、平坦ながらも砂堤の少し高い微高地と低（後背）湿地とからなっています。今日では微高地は集落や畑に、低湿地は水田や沼沢地となっていて、土地の利用の違いで一目で分かります。また、栗山川流域には、風によって形成された砂丘も見られます。

九十九里平野の形成年代については、そこに分布する遺跡の年代の違いによって分かってきました。砂州の上に営まれた芝崎遺跡や中島遺跡、栗山庚申塚遺跡からは縄文土器が出土していますが、屋形粉豆遺跡では平安時代の土器しか出ませんでした。また、台地や第1砂堤列の間にある低地では泥炭層がよく発達していて、その中から縄文時代の丸木舟が多く出土しました。このように遺跡から見た九十九里平野の形成は、縄文時代中ごろまでは第1砂堤列、平安時代には第2砂堤列、そして鎌倉時代頃にはほぼ今と同じになっていたと思われることが分かりました。



細長く形成された砂州上の遺跡（中島遺跡）



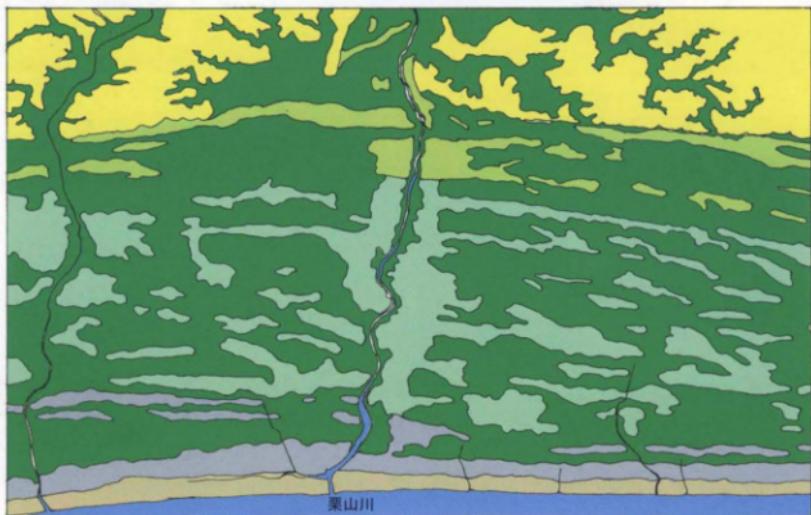
ハスが繁茂する乾草沼



水田の下に堆積する泥炭層



栗山川と九十九里平野



九十九里平野の地形区分

台地	こうはいしちち
第1砂堤列	さていれつ
第2砂堤列	
第3砂堤列	
今い砂浜	こういさはま

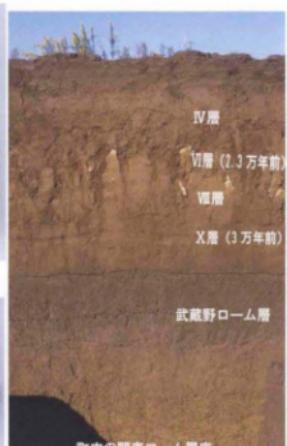
## 4. 初めて足跡をした人々 (町の歴史の始まり)

町にいつ頃から人々が住み始めたか、その手がかりは平成16年、長倉の鍛冶屋台遺跡の発掘調査で、今から3万年前の石器が出土したことから分かりました。石器は地表から1mの深さの赤土の中から、黒曜石の破片と一緒に石斧が出土しました。石斧は長さ8cm、幅5cmほどの丸みのある三角形の扁平な形で、刃の部分が擦って鋭く磨かれています。このような石器は日本の旧石器時代では、最も古いものの特長の一つで、今から3万年前の地層から出土します。同じ頃の遺跡では、山武市松尾町四ツ塚遺跡や成田市三里塚宮原第1遺跡など、本町の近くで多く見つかっています。

篠本出土の石器は、今から2万5千年前頃の石刃せきじりと言われる、刃物として使われたと思われるものです。



鍛冶屋台遺跡の旧石器時代発掘調査と出土した町内最古の旧石器



篠本出土の2万5千年前の旧石器（石刃）



氷河時代の横芝光町の光景

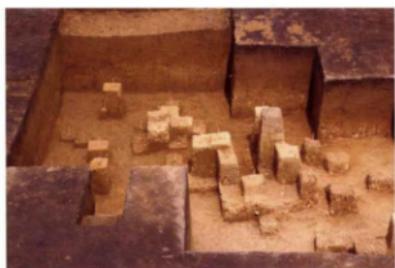
この時代は氷河時代とも呼ばれ、特に今から3～2万年前頃は最終氷期の最も寒かった時で、北欧やカナダには大陸氷河が発達して、海の水の多くがそこに堆積し、海面が今より100m以上も下がったと言われています。その頃の町の光景を想像して描いたのが上の図です。気温は今より年平均で6～7度低く、今の北海道のような気候で、山にはトドマツやトウヒなどの針葉樹や、ブナやミズナラなどの広葉樹などの森林であったと思われます。その森にはオオツノジカが棲み、それを旧石器人たちちは狩猟していたと想像されます。九十九里平野の下は海が次第に低下していくにしたがって、図のように海岸段丘が形成されていたと思われます。そうした低地には草原や湿地が広がり、ハシバミが生え、シカやヤギュウたちのいい生活の場となっていたことが考えられます。隣町の多古町志摩では、オオツノジカの化石が出土しています。旧石器人はこうした動物や木の実を採って、生活していました。



ハシバミ

## 5. 旧石器時代の生活

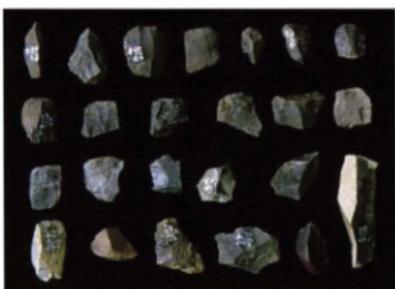
今から3万年前から1万年前の後期旧石器時代は、今よりも6~7度も気温が低い寒冷な氷河時代であったことは、その時代の地層から出てきた植物化石によってわかっています。多古町の志摩でもオオツノジカの化石骨が発見されています。このように寒い時でも人間はたくましく生活していましたことが、多くの遺跡やそこから見つかっている石器などからも想像できます。この時代は人が使う道具は石器しか残ってなく、その石器はナイフ形石器や槍先形石器などするどい形で、縄文時代の矢じりから比べると大きいものでした。これはオオツノシカのような大型の動物をとるためとも考えられています。また、町内の遺跡からは、形が四角で向かい合う両端から割った痕のある石器が多数出土していて、楔のかたちをしているところから楔形石器と呼ばれます。この石器は山武郡や香取郡などの県内東部に多く分布し、地域的に特徴のあるものといえます。楔形石器は日本の後期旧石器時代の前半（2万4千年前）の石器ですが、後半になると槍先形石器が増えています。町内では北長山野遺跡から、片方のふちに先端から割った痕のある石器が、2点出土しています。



寺方遺跡の旧石器出土状況



宮ノ前遺跡の旧石器出土状況



寺方遺跡出土の旧石器（ナイフ形石器と楔形石器）





寺方古墳群出土の旧石器  
(楔形石器と台石)



かじやだいいせき  
鍛冶屋台遺跡出土の旧石器



北長山野遺跡  
出土の旧石器  
(角錐状石器と  
槍先形石器)



木戸台遺跡出土の旧石器  
(ナイフ形石器と槍先)



旧石器時代の生活

## 6. 最古の縄文土器

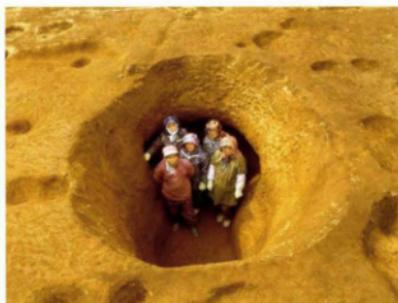
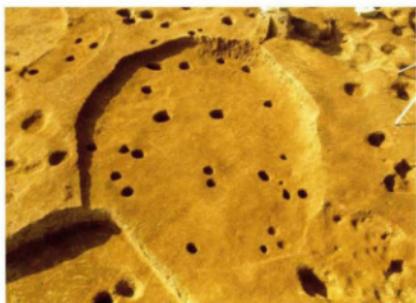
町内からは縄文時代のもっとも古い草創期と呼ばれる、今から1万4千～1万年前の時期の、土器や石器が出土しています。写真の左2点は有舌尖頭器と呼ばれる槍先か矢の先に着けた石器で、旧石器時代から縄文時代への変化の過程にあるものといえます。右の土器片は、同じころの初めて縄目文様

が付けられた土器で、表面だけでなく裏面にも縄目文様が付けられているので多縄文土器と言われ、この時期の土器の特徴です。

1万～7千年前の縄文時代早期になると、遺跡からは住居跡のほかに、落とし穴がよく見つかります。篠本の神山谷遺跡からは径3m、深さ3mの大きな落とし穴が見つかりました。なぜゾウでも落ちそうな大きな穴に、シカやイノシシなどを追い落して捕ったのか、縄文人のエネルギーを感じられます。



縄文時代草創期の土器・石器  
(篠本城山遺跡出土)



縄文時代早期の住居跡と落とし穴(ともに神山谷遺跡)

縄文時代早期の土器になると、縄目文様のほか、ヘラで線を描いたり、貝殻を使って描いた文様の土器が出てきます。この時期の土器の形は、底部が丸かったり尖っているところから尖底土器と呼ばれ、これは土器を柔らかい地面に突き立てた方が安定したからと考えられます。縄文時代早期は3千年と長く続いたところから、作られた土器は形の変化こそ少ないですが、文様が大きく変化しました。初めは縄や紐をさまざまに使って、いろいろな縄目文様が付けられ、まさに縄文土器と言えました。また城山遺跡では縄目文様土器の地域色ある土器が、多量に出土しました。次にヘラで線描きした文様の沈線文土器が続き、その次には赤貝類の貝で器面を飾った条痕文土器と呼ばれる土器が作されました。これらも町内から出土しています。

石器では早期のものと特定できるものは多くありませんが、**神山谷遺跡**では早期の特徴と言える石斧がまとまって出土しました。扁平な丸石のはしをすり磨いて刃を付けた石斧で、早期に多く見られる石器です。また、**城山遺跡**では矢じりやナイフのような石器が出土していますが、ほかの時期のも含まれているかもしれません。



宮ノ前遺跡出土の早期の土器



神山谷遺跡出土の早期の土器・石器



城山遺跡出土の早期の土器

## 7. 繩文土器のいろいろ

約1万年続いた縄文時代には、その時々、また各地でそれぞれ異なったさまざまな土器が作されました。早期は前の項で示しましたが、下に示した写真は町内から出土した前期から晩期までの土器です。これらの土器には、その特徴ごとに最初に出土した遺跡の名前をとって、「加曾利E式」というような土器型式という名前が付いています。この土器の変化を表にしたのが、15ページの図です。



前期の土器 縄文やヘラ描き文様、口が山形になって飾りが付く。



中期の土器 文様が立体的で複雑になり、形も様々なものがある。

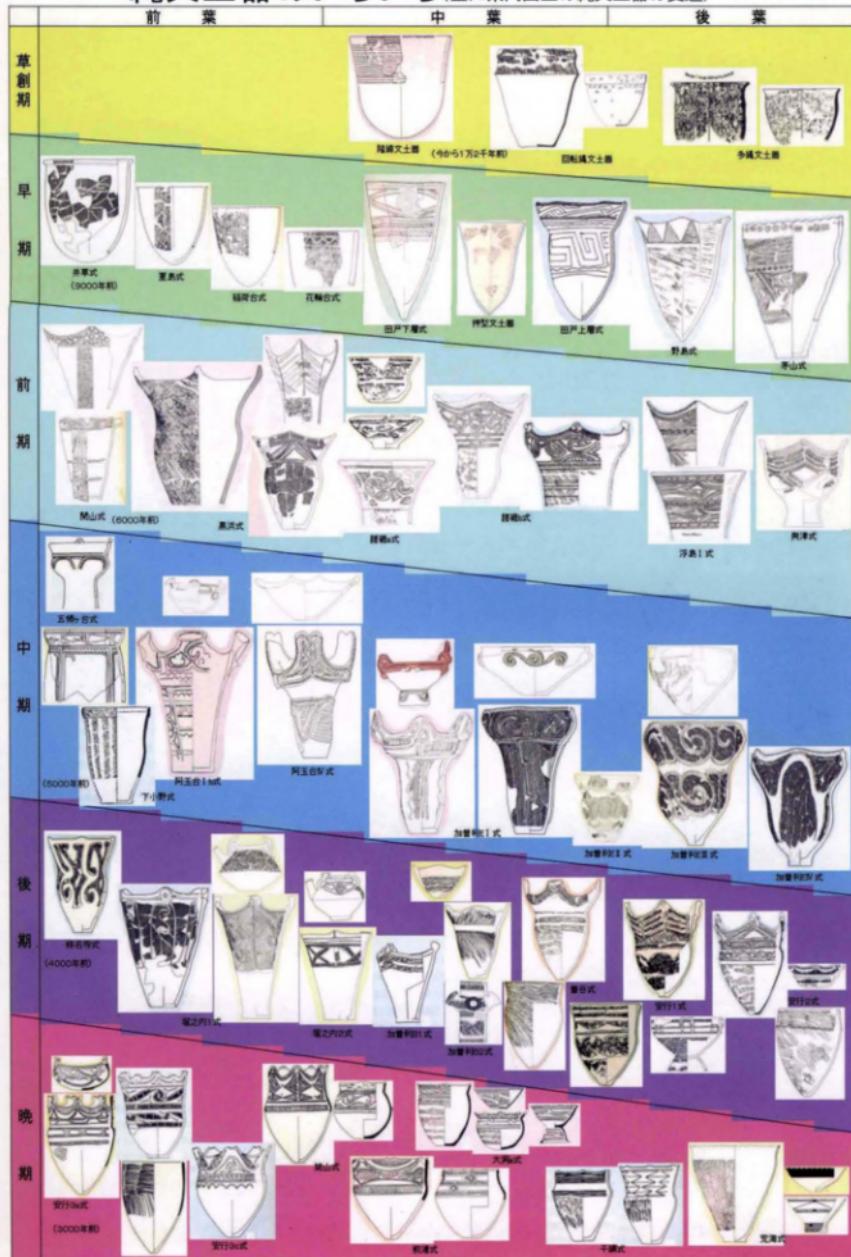


後期の土器 全体に小ぶりで多様な形が増え、文様が平面的になる。



晩期の土器 薄く精緻に作られ、文様が細かくなる。

# 縄文土器のいろいろ(主に県内出土の縄文土器の変遷)



## 8. 貝塚文化が栄えたころ

縄文時代では、海岸の近くや関東では内陸部まで多くの貝塚が遺されました。特に千葉県の東京湾岸には、千葉市の加曽利貝塚や市川市の堀之内貝塚など、巨大な貝塚が多く分布し、貝が豊富に生息し、縄文人が多くの貝を採って食料としていた証といえます。<sup>カキツリガハコ</sup>貝塚は縄文時代のゴミ捨て場ですが、貝殻の層の下からは、縄文時代の住居跡や貯蔵穴が出てきます。また、貝殻に混じってシカやイノシシなどの動物の骨や魚の骨、人の骨、それに生活に使った土器や石器など、当時のさまざまなものが出ます。そのため貝塚は、縄文時代のタイムカプセルだともえます。

町内にも大総地区に姥山貝塚があり、県内でも太平洋側で最大の貝塚として知られ、多くの貝殻や土器などが散布しています。このほか中台、木戸台、虫生駒形にも小さな貝塚があります。また、東長山野遺跡では住居跡や貯蔵穴の中から貝殻が出土しました。東長山野遺跡から出土した貝の種類を調べてみると、ダンペイキサゴやチョウセンハマグリなど、今も採れる貝のほか、アサリやハマグリ、マガキ、サギガイ、ヤマトシジミなど、今では近くの海岸で取れなくなった貝もあり、当時は豊かな海辺が広がっていたと思われます。また、貝のほか魚の骨、シカの骨・角、鳥の骨などもあり、当時の食生活の一端を見ることができます。



上空から見た姥山貝塚



貝殻が散布する姥山貝塚中央部



虫生駒形遺跡で見つかった小貝塚



東長山野遺跡の住居跡の貝殻

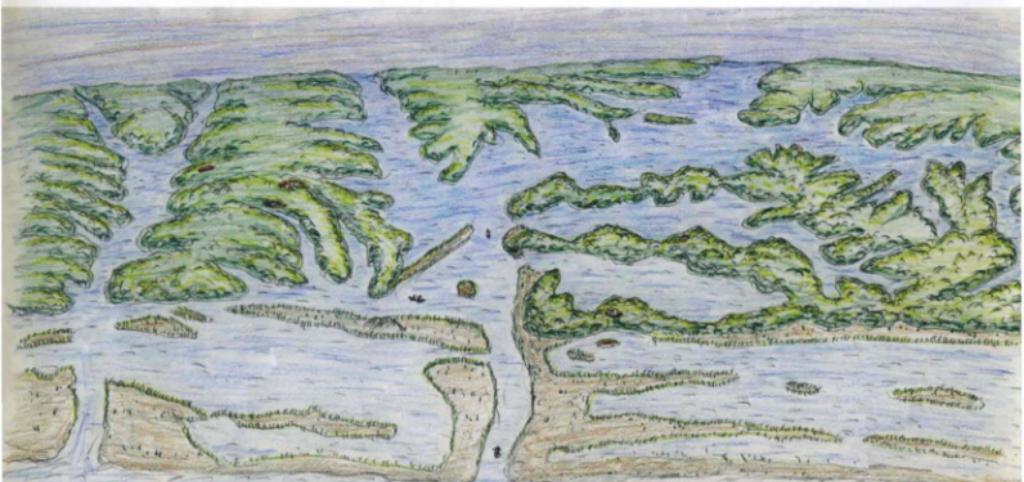


住居跡から出土した貝殻  
(東長山野遺跡)



貯蔵穴に捨てられた貝殻

縄文時代は、旧石器時代とは打って変わって暖かな時代であったと言われ、凍っていた氷河は溶けて海面が上昇し、氷河時代は谷底だったり、海岸段丘だった低い所は水没し、海水が内陸深くまで侵入しました。これを縄文海進と言い、栗山川流域も海水に浸され、下の図のような、今の宮城県松島のような光景が広がっていたと想像されます。東京湾では海が栃木県南部まで入っていたことが、縄文時代の貝塚の分布で分かりました。この最も海が内陸に入っていたのは縄文時代早期の終わりころ（今から7千年前）から、前期（同6千年前）までで、その後、海水に浸っていた所や海岸部、大きな川の河口部には土砂が次第に堆積し、陸地や湿地になっていき、九十九里平野のような沖積低地が形成されました。



縄文時代中ごろ(今から5千年前)の横芝光町の風景

## 9. 縄文人の生活

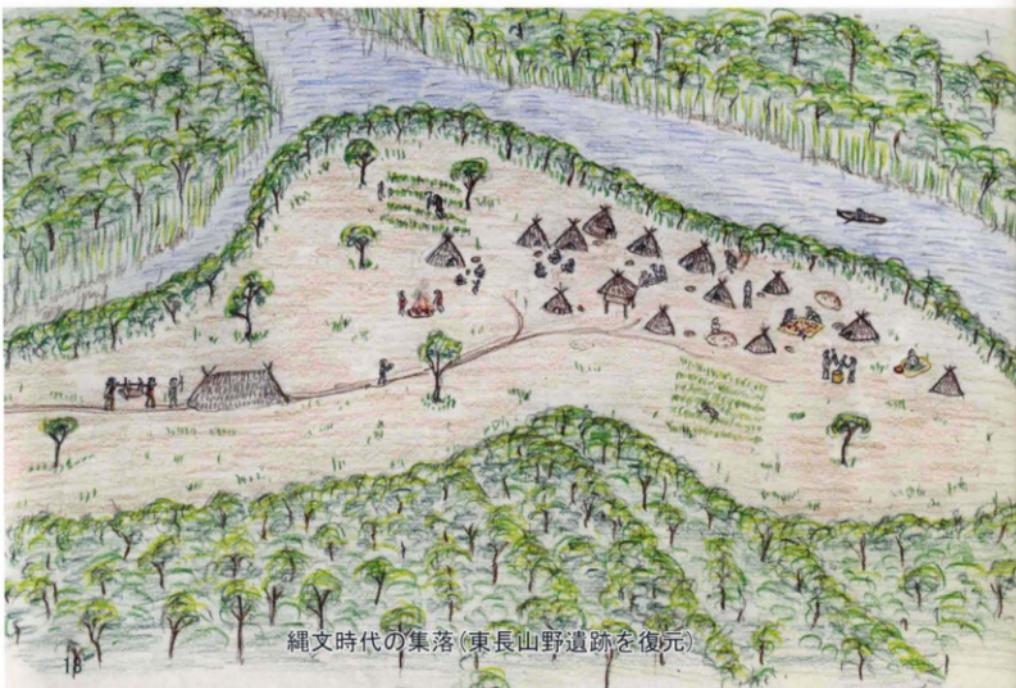
縄文時代の遺跡では、貝塚が残されているところから、縄文人は主に貝を食べていたと思いがちですが、それだけでなく栗やクルミ、トチなどの木の実や、ヤマイモなどから多くの炭水化物をとっていたことが、遺跡から出土したわずかな遺存物(炭化物・実殻)や、花粉分析によって分かってきました。横芝光町の隣の匝瑳市では、丸木舟とともに栗やクルミが多く出たという記録があり、縄文時代にこれらの木が多く生えていたと想像されます。縄文人はこれら木の実を主とする炭水化物、それにシカやイノシシなどの動物、魚や貝などの魚介類、それにはまだ分かりませんが、フキやセリなどの野の野菜と、身の回りで採れるさまざまなものを利用したとすると、食生活は豊かであったと考えられます。



東長山野遺跡の中央部



縄文中期の住居跡(東長山野遺跡)



縄文時代の集落(東長山野遺跡を復元)



中期の磨き石斧



いしざら  
石Ⅲ



魚網の錘-土器片錘  
ぎょもう おもり どきへんすい



縄文の装身具

### 東長山野遺跡から出土したいろいろな生活用具

東長山野遺跡からは、生活に必要な道具として、狩猟<sup>はがく</sup>に使う矢じり<sup>やのじり</sup>や木<sup>も</sup>を切る石斧<sup>いしのこ</sup>、木の実<sup>のぶ</sup>をつぶす石臼<sup>いしすう</sup>、魚を取る網の錘<sup>のぼり</sup>、身を飾った耳飾りなどが出土しました。



クリ



マテバシイ



遺跡から出た魚骨  
(東長山野遺跡)



オニグルミ



スダジイ



トチ



ヒシ



カヤ

### 縄文人の食料

## 10. 低地に進出した縄文人

縄文時代の中ごろ近くになると、海水で浸されていた低地に砂浜や砂州などの陸地ができ、そうした海に近い所に縄文人は進出していきました。砂州上の遺跡である芝崎の中島遺跡や、国道沿いの三反田遺跡からは、中期から後期初頭の土器が多数出土し、また炉(いろり)の跡も見つかり、ここで生活していたことがわかりました。また、低地の中でも葦や水草が腐らずに堆積した泥炭層からは、丸木舟が出土することがあります。本町から隣接の多古町、匝瑳市は全国的に、最も多くの丸木舟が出土した地域として知られ、これまでに32艘見つかっています。町内でも栗山川流域で9艘出ていて、高谷川低地遺跡では丸木舟とともに、櫂や櫓も出土しています。



中島遺跡の土器出土と炉



中島遺跡出土の縄文後期土器



芝崎遺跡検出の縄文後期の竪穴



芝崎遺跡出土の縄文後期土器



多古町志摩で出土  
した丸木舟  
(写真 多古町教育委員会提供)



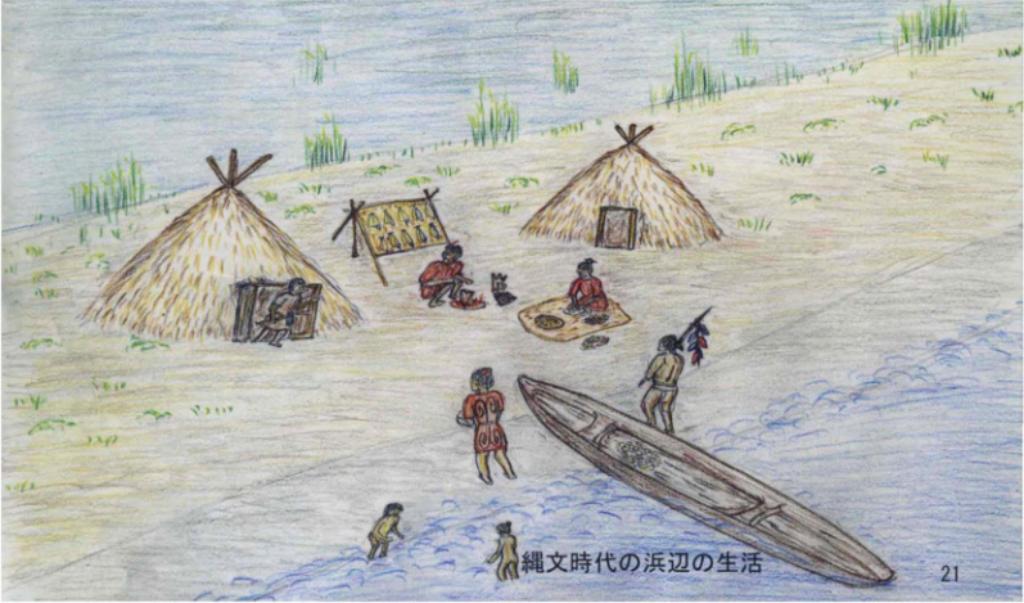
三反田遺跡の縄文土器出土



三反田遺跡出土の縄文土器



図書館付近で  
出土した縄文土器



縄文時代の浜辺の生活



図解 横芝光町の歴史 1

発行日 平成23年3月31日

編集・発行 横芝光町教育委員会

千葉県山武郡横芝光町宮川11907-2

TEL 0479-84-1358

FAX 0479-84-2877

印 刷

三陽工業株式会社